

新人看護師の社会人基礎力と関連要因の検討

The Investigation of New Nurses' Fundamental Competencies for Working Persons and Relevant Factors

北島 洋子・細田 泰子
Yoko Kitajima, Yasuko Hosoda

要旨

【目的】社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性を検証し、新人看護師の社会人基礎力に関連する要因を明らかにする。

【方法】200床以上の一般病院6施設の新卒で新規採用された1年未満の看護師473名を対象とし、社会人基礎力尺度、看護実践力尺度、日常生活経験および個人背景から構成される無記名自記式質問紙を配布し郵送法にて回収した。分析は社会人基礎力尺度の信頼性係数と社会人基礎力と看護実践力の相関係数の算出、日常生活経験が社会人基礎力に与える影響を多重ロジスティック回帰分析により検討した。

【結果】回収154名(回収率32.6%)、欠損値等を除いた分析対象131名。社会人基礎力尺度の36項目全体の Cronbach's α 係数は0.92、社会人基礎力と看護実践力は0.586 ($p=0.01$) の有意な相関関係にあった。多重ロジスティック回帰分析により新人看護師の社会人基礎力は学生時代の「授業時間以外に自己学習をする」等の日常生活経験の影響を受けていた。

【考察】社会人基礎力尺度はアセスメント指標として使用するにあたり、看護系大学生にも新人看護師にも適用可能と考える。また、新人看護師の社会人基礎力を高めるには学生時代の日常生活における主体的な学習活動や多様な人々との交流の機会を多く持つことが重要と示唆された。

キーワード：(社会人基礎力) (新人看護師) (看護実践力)

(Fundamental Competencies for Working Persons) (New Nurses) (Practical Nursing Skills)

I. はじめに

社会人基礎力は、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力(経済産業省, 2008)として経済産業省により策定され、現在、大学や企業において様々な育成の取り組みがされている。

グローバル競争の激化、IT化の進展に伴い若手社員へは難易度の高い仕事を期待される一方、近年の若者は少子高齢化や核家族化等の生活環境の変化に伴い職場で求められる能力を獲得しないまま社会人となり(経済産業省, 2010)、スムーズに職場に定着することが困難という、学校から職場への移行の問題がある。大学卒の離職率は1年以内12.2%、3年以内32.3%(厚生労働省, 2015)を示し、初期キャリアが形成される以前の段階で離職をすると、正社員で再度就職することが困難となり、その後のキャリア形成にとって悪影響を及ぼす(厚生労働省, 2013)こ

とも懸念されている。

新人看護師においてもリアリティショック（花岡ら，2006）や早期離職（小野田ら，2012）という、学生から職業人への移行の困難さを示した問題が存在する。新人看護師のキャリア発達におけるつまずきや挫折は個人的な問題に終わらず、看護職員の不足や看護の質の低下につながる可能性がある。組織における人材育成には多くのマンパワーやコストも費やされており、新人看護師が順調に育たないことは組織的、社会的にも損失となると考えられる。

近年、社会人基礎力は看護専門職においても有用な能力として注目され、看護部による社会人基礎力育成の取り組みも報告されるようになった（近藤，2013）。特に新人看護師にとって社会人基礎力は、チームの一員としての自覚を持ち、失敗してもそのダメージを乗り越えて早期離職に至らないようにするために必要な能力（高橋，2013）とされている。社会人基礎力は、新人看護師のスムーズな職場への適応と、チームに貢献できる人材としての職場への定着に資する能力として期待されている様子が伺える。

看護系大学生を対象とした調査によると、社会人基礎力はアクション、シンキング、チームワークの3分類、主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の12能力要素から構成され、経済産業省の提唱と同じ構造を示している（北島ら，2011）。社会人基礎力は専門知識と循環的に伸長する（経済産業省，2010）と考えられており、相関関係にある看護実践力と相互作用的に伸長するとされている（北島ら，2012）。社会人基礎力は、学生の日常生活経験における多様な人々との関わり、相互作用的な教授－学習活動、授業外学習を取り入れたインストラクショナルデザインが社会人基礎力の伸長に効果的で（北島ら，2012）、自己調整学習方略（藤田，2010）の下位尺度である努力調整方略とモニタリング方略の影響を受けるとされている（北島，2013）。

社会人基礎力の研究は、看護基礎教育の領域においては実践報告や会議録などの文献数は徐々に増加傾向にある。看護管理、人材育成の領域においても関心の高まりを見せているが、新人看護師を対象とした社会人基礎力の研究はまだ寡少であり、知識の蓄積は今後委ねられている状況と言える。これまで看護系大学生を対象として活用されてきた社会人基礎力の尺度（北島ら，2011）について、新人看護師への使用の適切性を検討し、新人看護師の社会人基礎力に関連する要因を検討することは意義がある。

II. 研究の目的

社会人基礎力尺度について、新人看護師を対象としたアセスメント指標としての適用可能性を検証し、社会人基礎力に関連する要因を明らかにする。

III. 用語の定義

1. 社会人基礎力

経済産業省（2008）の定義を参考に、社会人基礎力とは、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力で、看護師の組織社会化、職場適応を促進し、看護実践の基盤となる能力とする。

2. 看護実践力

細田ら（2007）の定義を参考に、看護実践力とは、看護ケアの望ましい成果を伴うタスクの遂行、専門的知識と技術の効果的な適応、看護実践の省察をするための能力で、看護活動の質に影響する、生涯にわたり向上する能力

とする。

3. 日常生活経験

日常生活経験とは、社会経験、生活体験、学習経験等の大学生の日常生活における経験とする（北島ら，2012）。

4. 新人看護師

免許取得後に初めて就労する看護職員であり、おおむね1年未満の時期にある看護師（厚生労働省，2011）。

IV. 方法

1. 研究デザイン

量的記述的研究。

2. 調査対象

日本医療機能評価機構に認定されている200床以上の一般病院から、近畿圏に設置されている施設を有意に抽出し、看護管理者から調査協力の意向が示された6施設に所属する新卒で新規採用された1年未満（1年目）の看護師473名を対象とした。

3. 調査期間

平成26年8月から12月。

4. 調査方法

無記名自記式質問紙法。質問紙は社会人基礎力尺度、看護実践力尺度、日常生活経験および個人背景から構成され、これらへの回答には約20分を要し、郵送法により回収した。社会人基礎力尺度は、北島ら（2011）が経済産業省のプログレスシートを参考に信頼性と妥当性を検討した36項目6段階リッカート・スケールを使用した。看護実践力尺度（細田ら，2007）の20項目は5段階リッカート・スケールで評価し、下位尺度は「志向する力」、「展開する力」、「実施する力」、「評価する力」から構成され、看護学生を対象に信頼性と妥当性が確認された尺度を看護師対象に一部文言を修正しCronbach's α 係数0.88の信頼性を確認した尺度（片山ら，2013）を使用した。日常生活経験は、社会経験、生活体験、学習経験について、学生生活実態調査（東京大学広報委員会，2008）と私立大学学生生活白書（日本私立大学連盟，007）を参考に、北島ら（2012）によって作成された40項目であり、看護学生時代の日常生活経験の頻度を回答するよう教示した。個人背景は年齢、性別、看護職経験年数、基礎教育課程の種類、保有免許の種類、看護師として就職するまでの社会人経験の有無を質問した。

5. 分析方法

分析は統計解析ソフトSPSS Ver.23 for Windowsを使用し、個人背景の記述統計量、社会人基礎力のCronbach's α 係数を算出し、新人看護師へのアセスメント指標としての信頼性を検討した。社会人基礎力と看護実践力の関係はSpearmanの相関係数、社会人基礎力と日常生活経験の関係は多重ロジスティック回帰分析によって検討した。

6. 倫理的配慮

大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を受け実施した（承認番号26-31）。調査協力においては対象者の自由意思を尊重し、個人のプライバシーを保護するため郵送法による回収とした。書面にてデータは厳重に管理し、研究終了後は破棄することを説明し、調査者にはいつでも質問できるよう連絡先を明示した。

V. 結果

調査票は473名に配付し、154名から回答を得た（回収率32.6%）。欠損値のある5名を除いた149名（有効回答率96.8%）のうち、社会人経験を有する者は回答傾向が異なる（北島ら，2011）可能性があるため、社会人経験があると回答した15名は分析から削除し、さらに回答傾向に偏りがあり外れ値と認められる3名を除き、最終的に131名を分析対象とした。調査協力施設の病院機能別区分は、特定機能病院3施設、地域医療支援病院2施設、一般病院1施設であった。

調査協力者の属性は、女性115名（87.8%）、男性16名（12.2%）、平均年齢22.6歳であった。看護の学歴において最も多かったのは4年制大学卒69名（52.7%）、次いで専門学校3年課程43名（32.8%）であった（表1）。

社会人基礎力の合計得点は105から178の範囲にあり、中央値は138であった（表2）。看護実践力は47から89の範囲にあり、中央値は73であった。

表1. 調査対象者の属性

				n=131	
		n	%	平均値	標準偏差
年齢				22.6	1.51
看護師の経験月数				6.6	0.89
性別	女性	115	87.8		
	男性	16	12.2		
免許種別	看護師	74	56.5		
	看護師/保健師	53	40.5		
	看護師/助産師	3	2.3		
	看護師/保健師/助産師	1	0.8		
看護の最終専門学歴	大学	69	52.7		
	専門学校 3年課程	43	32.8		
	保健師学校・専攻科	6	4.6		
	短期大学 3年課程	4	3.1		
	専門学校 2年課程	3	2.3		
	助産師学校・専攻科	2	1.5		
	短期大学 2年課程	1	0.8		
	大学院 修士課程	1	0.8		
	その他	2	1.5		
所属部署	外科系単科	35	26.7		
	混合病棟	32	24.4		
	内科系単科	23	17.6		
	救急	10	7.6		
	ICU・CCU	5	3.8		
	精神科	5	3.8		
	産科	4	3.1		
	NICU	4	3.1		
	その他	13	9.9		

表2. 社会人基礎力36項目の記述統計量

n=131										
	範囲	最小値	最大値	第1四分位範囲	中央値	第3四分位範囲	歪度	歪度の標準誤差	尖度	尖度の標準誤差
社会人基礎力	73	105	178	130.00	138.00	150.00	.217	.212	-.301	.420
アクション	26	21	47	31.00	34.00	36.00	-.046	.212	.581	.420
シンキング	27	14	41	28.00	31.00	35.00	-.343	.212	.459	.420
チームワーク	40	56	96	69.00	74.00	81.00	.365	.212	-.290	.420

社会人基礎力36項目について、Shapiro-Wilkの正規性の検定の結果は、社会人基礎力合計得点で正規分布を認めた。新人看護師の社会人基礎力の内的整合性の検討を実施し、36項目のCronbach's α 係数は0.92、アクション、シンキング、チームワークの下位尺度レベルにおいても0.83から0.89を示した（表3）。

新人看護師の社会人基礎力と看護実践力のSpearmanの相関係数は、0.586 ($p < 0.01$) の有意な相関関係にあり、下位尺度レベルでも相関係数が0.281 ($p < 0.01$) から0.461 ($p < 0.01$) を示す有意な相関関係にあった（表4）。

表3. 社会人基礎力のCronbach's α 係数

n=131		
	項目数	Cronbach's α
社会人基礎力	36	0.92
アクション	9	0.83
シンキング	9	0.84
チームワーク	18	0.89

表4. 社会人基礎力と看護実践力の相関係数

		n=131			
		看護実践力			
		志向する力	展開する力	実施する力	評価する力
社会人基礎力	0.586**				
アクション		0.396**	0.404**	0.461**	0.353**
シンキング		0.297**	0.349**	0.416**	0.281**
チームワーク		0.457**	0.429**	0.472**	0.461**

** 1%水準で有意(両側)

多重ロジスティック回帰分析による社会人基礎力への学生時代の日常生活経験が及ぼす影響の検討を実施するにあたり、相関行列を観察し多重共線性が存在しないことを確認した。多重ロジスティック回帰分析の従属変数には中央値で2値化した社会人基礎力合計得点、独立変数には日常生活経験40項目を投入した。尤度比を用いた変数減少法のステップワイズによる多重ロジスティック回帰分析のモデル χ^2 検定の結果は $p < 0.01$ で有意であり、各変数も有意 ($p < 0.05$) であった。Hosmer & Lemeshowの検定結果は $p = 0.32$ 、判別の中率は75.6%であった。社会人基礎力の影響要因として採択された項目は以下のとおりである。

日常生活経験の「異性の友達とコミュニケーションをもつ」、「授業時間以外に自己学習をする」、「新聞を読む」、「身近な人の看病や介護をする」は社会人基礎力に対して正の影響を示した。日常生活経験の「学校のカウンセラーに相談する」、「祖父や祖母と一緒に生活をする」、「塾や予備校で学ぶ」は社会人基礎力に対して負の影響を示した（表5）。

表5. 社会人基礎力への学生時代の日常生活経験が及ぼす影響

	偏回帰係数	有意確率 (p)	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
				下限	上限
異性の友達とコミュニケーションをもつ	0.601	0.004	1.823	1.211	2.745
授業時間以外に自己学習する	0.586	0.011	1.798	1.143	2.828
新聞を読む	0.544	0.009	1.723	1.147	2.589
身近な人の看病や介護をする	0.463	0.004	1.589	1.162	2.172
塾や予備校で学ぶ	-0.268	0.049	0.765	0.585	0.999
祖父や祖母と一緒に生活する	-0.282	0.018	0.755	0.598	0.952
学校のカウンセラーに相談する	-0.666	0.008	0.514	0.313	0.843

n=131

モデル χ^2 検定 $p < 0.01$ Hosmer&Lemeshow検定結果 $p = 0.32$ 判別率 75.6%

VI. 考察

1. 新人看護師の社会人基礎力の得点分布と属性

本調査の社会人基礎力合計得点の得点範囲は105～178、中央値138であった。本調査の結果は、糸嶺ら（2015）による新人看護師対象の調査における社会人基礎力合計得点の平均値137.5と同程度と考えられる。

先行研究による看護系大学の4年次生を対象とした調査では、社会人基礎力合計得点の得点範囲は86～197、中央値145（北島ら，2012）と報告されている。看護系大学生と比較すると新人看護師の得点分布は最大値と中央値が低く最小値は高いため、得点範囲は狭まっていた。これは新人看護師として日々の就労経験を積む中で一定程度の社会人基礎力は底上げされるため、新人看護師の社会人基礎力の最小値は看護系大学生よりも高い値を示したのではないかと考える。

中央値については新人看護師のほうが看護系大学生より低値を示した。これは看護師の1年目は自分の能力不足に関するストレスが最も高い（藤原ら，2001）時期であることの影響によるものと推察される。また、社会人基礎力は看護実践力と相関関係がある（北島ら，2012）ことから、就職後1年未満の看護実践に自信が持てない時期は、社会人基礎力の自己評価も低下するのではないかと考えられる。大学の4年次生は看護学生としての経験を積み1年次生よりも能力や自信も高まっている可能性があるが、新人看護師は社会人として実際に就労する中で自己の未熟さや能力不足への自覚が増すのではないかと推察される。これらのことより新人看護師の社会人基礎力の中央値が看護系大学生より低値を示したことは妥当であったと考えられ、本尺度は新人看護師の社会人基礎力の状況を捉えた結果を示したと考える。

2. 新人看護師の社会人基礎力の信頼性

新人看護師の社会人基礎力36項目のCronbach's α 係数は0.92を認め、看護系大学生を対象とした先行研究（北島ら，2011）におけるCronbach's α 係数0.94と大差のない値であり、下位尺度ごとにみてもCronbach's α 係数は0.83から0.89を示し、十分な内的一貫性を確認することができたと考える。新人看護師は教育機関を卒業後1年未満であり学生時代からの時間的な経過は短く、質問項目の文言に対する理解の程度や回答の傾向には看護系大学生との相異が少なく同等の信頼性係数が確認されたのではないかと考える。

本研究は横断的に新人看護師への尺度の適用可能性を検討し、社会人基礎力36項目は看護系大学生と同様の信頼性を示したことから、新人看護師を対象とした使用にも対応可能と考える。

3. 新人看護師の社会人基礎力と看護実践力の関係

社会人基礎力の「チームワーク」は看護実践力のすべての下位尺度と中程度の相関を示していることから、看護実践力を発揮するには「チームワーク」が重要であると考えられる。看護は個人単位ではなくチームによって実践されるものであり、チーム医療が推進されている今日は、看護師のみならず多職種と連携した質の高い医療の提供が求められている。社会人基礎力は、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行うための能力であり、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」という能力要素が「チームワーク」に含まれる。これらの能力を高めることにより、看護実践力も高められると推察され、新人看護師への教育プログラムや看護基礎教育においてこれらの能力を伸ばさせる取り組みを行うことは、看護を実践する力の伸長にも効果的であると考えられる。

看護実践力の「実施する力」は社会人基礎力のすべての下位尺度と中程度の相関を示した。社会人基礎力は能動的な要素が強いため、看護実践力のなかでも特に「実施する力」と社会人基礎力の下位尺度が一律に相関を示したものと考える。社会人基礎力は仕事を行っていく上で必要な能力とされており、看護を実践していくには社会人基礎力が重要であることが結果から示されたと考えられる。

社会人基礎力と看護実践力の相関関係についても、看護系大学生を対象とした先行研究（北島ら，2012）と同様に中程度の相関を有し、下位尺度においても有意な正の相関関係を示すことが確認された。これにより、先行研究（北島ら，2012）と同様に新人看護師の社会人基礎力は看護実践力と相互作用的な関係にあることが明らかとなり、新人看護師への社会人基礎力尺度の適用は可能であると考えられる。

4. 新人看護師の社会人基礎力に日常生活経験が及ぼす影響

多重ロジスティック回帰分析のモデルは、 χ^2 検定は有意であるため回帰式の有意性が保証され（対馬，2008）、Hosmer & Lemeshowの検定結果は有意確率が大きいこと、すなわち、有意にならないことがモデルの適合度が良いということの根拠となる（内田，2011）。判別の中率は目的にもよるが目安として75%は必要（内田，2011）と言われていることから、本研究の75.6%は良好な値を示し、回帰式は予測に使用可能なものであったと考えることができる。

日常生活経験が社会人基礎力に及ぼす影響についても、多重ロジスティック回帰分析により「異性の友達とコミュニケーションをもつ」、「授業時間以外に自己学習をする」、「新聞を読む」、「身近な人の看病や介護をする」という経験が多いほど社会人基礎力も高値となると予測された。先行研究（北島ら，2012）においても同様の経験が社会人基礎力に正の影響を与える要因とされている。

また社会人基礎力に対し負の影響を示していた「学校のカウンセラーに相談する」は、先行研究（北島ら，2012）においても同様の結果であった。その他に「祖父や祖母と一緒に生活をする」「塾や予備校で学ぶ」も含め合計3項目が負の影響を示していたがオッズ比は低値であった。これらの日常生活経験は主体的な活動ではないと考えられ、社会人基礎力には負の影響を示した可能性があると考えられる。

本研究は看護系大学生を対象とした先行研究（北島ら，2012）を参考に、新人看護師を対象として看護学生時代の日常生活経験の頻度を想起する形で回答を求め、調査時の社会人基礎力への影響を検討した。社会人基礎力が日常生活経験から受ける影響は、新人看護師対象の調査においても先行研究（北島ら，2012）と類似性の高い結果を得ることができたことにより、社会人基礎力尺度は新人看護師への適用可能性を有すると考えられる。

多重ロジスティック回帰分析の結果、社会人基礎力に正の影響を与えることが示された日常生活経験から、学生

時代の日常生活において授業時間以外にも自己学習を行い、主体的な学習姿勢を身につけておくことや、多様な人々とのコミュニケーションや近親者の世話などの豊富な経験をすることにより新人看護師の社会人基礎力は高まる可能性があることが示唆された。

VII. 本研究の限界と課題

本研究は会人基礎力尺度の新人看護師への適用における妥当性を検討した。本調査においては6施設の調査であったという限界があり、今後はさらに対象施設数を増やした調査を実施し、構成概念妥当性を明らかにする必要があると考える。また、異なる母集団による調査結果の比較検討には限界があるため、縦断的研究デザインによる検討を実施することが今後の課題と考える。

VIII. 結論

本研究において社会人基礎力尺度を新人看護師対象の調査に使用し、尺度の信頼性を確認し、先行研究と本研究の結果には類似性を認めた。社会人基礎力尺度を新人看護師対象の調査におけるアセスメント指標として使用するにあたり、適用可能な尺度であると考え。また、新人看護師の社会人基礎力を高めるには、学生時代の日常生活における主体的な学習活動や多様な人々との交流の機会を多く持つことが重要であると示唆された。

付記：本研究は、科学研究費助成事業（研究課題番号：25463333）の助成を受けて実施した研究の一部である。また、第41回日本看護研究学会学術集会において本研究の一部を発表した。

文献 (Reference)

- 新井一寿. (2010). 若手社員の適応・戦力化状況とSPII2との関係. *RMS message* 2010, 22, 34-41.
- Clark, C. M., & Springer, P. J. (2012). Nurse residents' first-hand accounts on transition to practice. *Nursing Outlook*, 60(4), 2-8.
- 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会. (2011). 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会最終報告. <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbk2.pdf>
- 藤田正. (2010). 大学生の自己調整学習方略と学業援助要請との関係. *奈良教育大学紀要*, 59 (1), 47-54.
- 花岡澄代, 福田敦子, 津田紀子, 他. (2006). 病院に就職した新卒看護職者の初期職場適応に関する検討：初期職場適応の潜在構造とリアリティショックとの関連から. *神戸大学医学部保健学科紀要*, 22, 1-11.
- 細田泰子, 荒木孝治, 古山美穂, 他. (2007). 看護学士課程の学生の情報活用の実践力と看護実践力の関連 eラーニング導入前における学年間比較. *大阪府立大学看護学部紀要*, 13 (1), 19-26.
- Institute of Medicine. (2003). *Who will keep the public healthy? Educating public health professionals for the 21st century 2003*. National Academic Press. Washington D.C.
- 糸嶺一郎, 高山裕子, 山本貴子, 他. (2015). 新卒看護師の社会人基礎力に関する尺度の妥当性と信頼性の検討. *日本保健福祉学会誌*, 22 (1), 23-32.
- 垣花渉. (2013). コミュニティ形成をとおした社会人基礎力の育成. *看護展望*, 38 (7), 21-27.
- 片山由加里, 細田泰子. (2014). 実習指導看護師と学生の看護実践力に関連する感情労働. *日本医学看護学教育学会誌*, 23 (1), 1-6.

- 経済産業省. (2008). 今日から始める社会人基礎力の育成と評価. pp2-4. 東京：角川学芸出版.
- 経済産業省. (2010). 社会人基礎力育成の手引き. pp8-35. 東京：朝日新聞出版.
- 北島洋子. (2013). 看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係. 醫學と生物學, 157 (2), 222-228.
- 北島洋子, 細田泰子, 星和美. (2011). 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討. 大阪府立大学看護学部紀要, 17 (1), 13-23.
- 北島洋子, 細田泰子, 星和美. (2012). 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係. 日本看護学教育学会誌, 22 (1), 1-12.
- 近藤昭子. (2013). 社会人基礎力の向上に向けた聖マリアンナ医科大学病院の取り組み. 看護展望, 38 (7), 7-13.
- 遠藤みどり, 石田貞代, 松下由美子, 他. (2007). 看護実践能力向上のための取り組み－臨地実習での技術項目リスト・チェック表の活用－. 山梨県立大学看護学部紀要, 9, 43-54.
- 厚生労働省. (2013). 平成25年版 厚生労働白書. <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15-1/dl/gaiyou.pdf>
- 厚生労働省. (2011). 新人看護職員研修ガイドライン. <http://www.nurse.or.jp/nursing/education/shinjin>
- 厚生労働省. (2015). 新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移. <http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/dl/24-02.pdf>
- Meretoja, R., Isoaho, H., Leino-Kilpi, H. (2004). Nurse Competence Scale : development and psychometric testing, *Journal of Advanced Nursing*, 47, 124-133.
- 永井隆雄. (2008). 看護師におけるバーンアウトと離・転職意思. 人材育成研究, 4 (1), 17-29.
- 永田美奈加, 佐々木理恵子, 大高恵美, 他. (2008). 新卒看護師の看護実践能力の実態と傾向－本学卒業の新卒者の自己評価と上司による他者評価から－. 日本赤十字秋田短期大学紀要, 12, 21-30.
- 日本私立大学連盟. (2007). 私立大学学生生活白書2007. 東京：ウェイヴインターナショナル.
- 日本看護協会. (2004). 新卒看護職員の早期離職等実態調査. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/dl/s0329-13b-5-3.pdf>
- 小野田舞, 内田宏美, 津本優子. (2012). 新卒看護師の職場適応とその影響因子に関する縦断的研究. 日本看護管理学会誌, 16 (1), 13-23.
- Ross A. M., Noone J., Luce L.L., Sideras S.A. (2009). Spiraling evidence-based practice and outcomes management concepts in an undergraduate curriculum : a systematic approach. *The Journal of Nursing Education*, 8(6), 319-326.
- Schwirian, P. M. (1978). Evaluating the performance of nurses: a multidimensional approach. *The Journal of Nursing Research*, 27, 347-351.
- 諏訪康夫. (2006). 社会と教育界の間に社会人基礎力という共通言語をもうけることが重要課題. 法律文化, 264, 40-42.
- 高橋恵. (2013). いま看護職に求められる社会人基礎力とは. 看護展望, 38 (7), 4-6.
- Tanner C. A., Gubrud-Howe P, Shores L. (2008). The Oregon Consortium for Nursing Education: a response to the nursing shortage. *Policy, Politics & Nursing Practice*, 9(3), 203-209.
- Thomas, C. M., Bertram, E., & Allen, R. L. (2012). The transition from student to new registered nurse in

- professional practice. *Journal for Nurses in Staff Development*, 28(5), 243-249.
- 特定非営利活動法人関東地域インターンシップ推進協会. (2007). インターンシップにおける社会人基礎力の実践的活用に関する調査報告書. <http://www.jipc.or.jp/university/uni0400.html>
- 富樫敦, 山田智子, 庄子栄光, 他. (2998). 産学官連携による社会人基礎力育成・評価事業－宮城大学モデル「人材の地産地消」地域で育てた人材を地域で活かす－. *電子情報通信学会技術研究報告*, 108 (185), 31-36.
- 東京大学広報委員会. (2008). 2007年 (第57回) 学生生活実態調査の結果. <http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1380/pdf/1380.pdf>
- 対馬栄輝. (2008). *SPSSで学ぶ医療系多変量データ解析*. 東京: 東京図書.
- 内田治. (2011). *SPSSによるロジスティック回帰分析*. 東京: オーム社.
- 渡辺かおり, 山田香, 内藤淳. (2011). 企業における若年層の社会人基礎力の年次変化に関する考察. *RMS message*, 23, 36-41.
- 吉田礼子. (2007). 新卒看護師のClinical Competence－ロジャースの方法に基づいた概念分析－. *東海大学短期大学紀要*, 41, 83-91.
- 日本看護協会出版会. (2014). 平成26年 看護関係統計資料集. <https://www.nurse.or.jp/home/publication/toukei/pdf/toukei15-2015.pdf>